慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Elemento esvarabáticoの長さと日西母語話者による語頭音素連続/CrV/と/CVrV/の発音
Sub Title	Duration of svarabhakti element (elemento esvarabático) and analysis of pronunciation of the initial sequences/CrV/y/CVrV/by native Spanish and Japanese speakers
Author	松本, 旬子(Matsumoto, Junko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.16, (2019.) ,p.95- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20190000-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Elemento esvarabáticoの長さと日西母語話者による語頭音素連続/CrV/と/CVrV/の発音

松　本　旬　子

１．はじめに*

本稿は、松本（2014、2017）の後続研究結果をまとめるものである。まず、スペイン語母語話者の発話に観察されると指摘されているelemento esvarabáticoを長さの面から定義することを目指す。続いて、日西母語話者による語頭音素連続/CrV/と/CVrV/の発音を分析・比較し、今後の日本語母語話者へのスペイン語発音教育の場面で活かすべき点を示すことを目指す。

２．先行研究と本稿の位置付け

２.１．Elemento esvarabáticoとは

Elemento esvarabáticoとは、スペイン語母語話者が破裂音（/p, b, t, d, k, g/）あるいは唇歯摩擦音（/f/）＋はじき音（/r/）で構成される音素連続（/pr, br, tr, dr, kr, gr, fr/）を発話した際に、２つの子音間に挿入される母音に近い音響的要素である。Quilis（1993：337−338）によれば、1892年にRodolfo Lenzがチリの知識人の間で見られると初めて指摘したものである。その後Navarro Tomás（1918:385−386）やGili Gaya（1921:274）、Malmberg（1965:31−39）によっても言及されている。

その特徴は、後続する母音に近い音響的要素を持つとされ、このelemento esvarabáticoが１音節を作る母音へと発展する暁には、音素連続間に出現するのは後続する母音と同じ音になるとされている。例として、tiguere[1]（＜tigre）、corónica（＜crónica）、gurupa（＜grupa）、chácara（＜chacra）、queresa（＜cresa）、albiricias（＜albricias）が挙げられる（Quilis 1993: 340−342）。

またWiddison（2004）では、破裂音（/p, b, t, d, k, g/）あるいは唇歯摩擦音（/f/）＋有声歯茎側音（/l/）ではelemento esvarabáticoは観察されないと結論されている。そして松本（2014）においてスペイン語母語話者の女性１人の発話分析を行い、以上の先行研究を支持する結果を得た。

2.2. 日本語母語話者のスペイン語の発音

日本語[2]母語話者がスペイン語を発音する際、他外国語の発音時と同様に、語中音挿入や語末の母音添加などの方略を行うことが指摘されている（興津 1992，ロボ他 1993，北村・ルエダ デ レオン 1995，木村 2015）。スペイン語は開音節を好む言語ではあるが（Iribarren 2005：75）[3]、日本語の音節構造にはそれ以上に開音節が多く見られ、閉音節をほとんど許容しないこと[4]がその原因であると考えられる。一方で、日本語母語話者はスペイン語の [u] の代わりに日本語の [ɯ] を用い、そのため東京方言に見られる母音の無声化[5]がスペイン語の発音にも現われることがあるという指摘もある（Hara 1990）。

2.3. 本稿の位置付け

このような相反するとも捉えられる指摘がある日本語母語話者によるスペイン語の発音を、スペイン語の二重子音を語頭に含む音素連続 /CrV/ と、それらとカナ表記では区別されない /CVrV/ の発音分析から考察する[6]。/CrV/ の C・r 間に音挿入がなされるならば /CVrV/ と同じになるだろう。逆に /CVrV/ で母音の無声化が見られるならば /CrV/ と同じになる。そうなると、日本語母語話者は異なるつづりであるスペイン語の音素連続を、カナ表記で区別しないのと同様、区別せずに発しているのではないか、との考えに至る。そこでスペイン語母語話者による発音と比較し、最終的に日本語母語話者がスペイン語をどう発音すべきかを示す。

またスペイン語母語話者の elemento esvarabático の分析を行うが、これは日本語母語話者による /CrV/ の C・r 間への音挿入とどう異なるのか長さの面から考察するためである。

3. コーパス

コーパスは松本（2017）で使用したもの[7]に、日本語母語話者は男性 1 人・女性11人分を加えた計41人分、スペイン語母語話者はスペイン人男性 2 人・女性 1 人分を加えた計 4 人分のデータである。

取り扱うのはスペイン語の二重子音[8] 12種類（pr, br, fr, cr, gr, tr, dr, pl, bl, fl, cl, gl）[9]と、同じ子音音素を含む /$C_1V_1C_2V_2$/ に /ki/ を後続させた無意味語で、阻害音を C_1 に、流音を C_2 に持つ。C_1 が /p, b, f, k, g/ の場合 V_1 は /u/、C_1 が歯破裂音 /t, d/ の場合は V_1 は /o/ とし[10]、V_2 には母音 5 種類（/a, e, i, o, u/）を充てた計120種類である。ただし日本語母語話者の場合は、r と l の発音の区別が容易でないことが想像されたので C_2 が r のもの、すなわち /CrV/ と /CVrV/ の70種類のみを取り扱うこととした。

無意味語がキャリア・センテンス “Leo el término X（「X という語を読みます」の意）.” の X 部分にランダムに表示されるパワーポイントを作成し、調査協力者には MacBook Air（13-inch, 2017; Apple, Tokyo, Japan）のディスプレイに表示されたキャリア・センテンスと無意味

語を「自然な速さ」で朗読するよう依頼した。

新たな調査協力者のうち日本語母語話者は、松本（2017）同様、第二外国語としてスペイン語を二年間に渡って週２コマ[11]学んだ大学生である。録音は2016年１月下旬に慶應義塾大学日吉キャンパス内の防音室（来往舎のスタジオ）に於いて行われた。

スペイン語母語話者への追加音声録音１回目は、2016年７月初旬に小田原の閑静な住宅街に佇む一軒家の離れで、マドリード出身の50代男女各１人を対象に行われた[12]。２回目は2018年７月初旬、拓殖大学文京キャンパス内の筆者研究室に於いて、カスティーリャ出身の40代男性１人を対象に行われた[13]。

使用機器は、いずれの録音でもオリンパス マルチトラックリニア PCM レコーダー LS−100とその内蔵マイクである[14]。録音した音声を、MacBook Air（同上）にインストールしたAudacity（Audacity Team. Version 2.3.1）で発話ごとに切る編集作業を行ったのち、Praat（Boersma and Weenink. Version 6.0.33）で分析した。音声資料の波形、スペクトログラムを表示し、耳で聞き、波形の振幅の大きくなっているところで母音のあたりをつけ分節ラベリングした。図１に分析例を挙げる。図１のようにラベンリングして母音（に近い音響的要素）の開始時刻と終了時刻を確定し、持続時間を計測した。

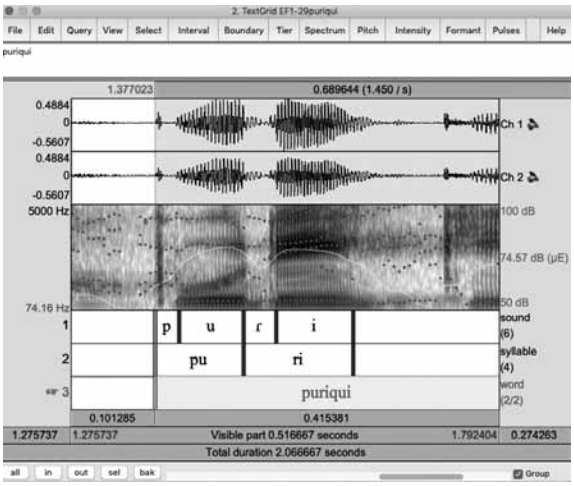

図１　音素連続“puriqui”のラベリング例

4． スペイン語母語話者の elemento esvarabático（EE）[15]の長さ

4.1． 結果

スペイン語母語話者の発話で観察された EE を “CrVqui”・“ClVqui” の場合に分け表１・２に示した。長さの単位は秒（s）で、小数第４位を四捨五入し小数第３位までを表示した（以下すべての表に共通）。最右列の「平均」とは調査協力者ごとの EE の平均の長さである。最上段は音素連続を構成する語頭の子音を示しており、その下の数値は語頭音素ごとの各調査協力者平均（すなわち女性１の b の欄は、“braqui”・“brequi”・” briqui”・“broqui”・“bruqui” で女性１が発した EE の長さの平均）を、最下段は調査協力者４名の語頭音素ごとの平均を表す。

表１ “CrVqui” に見られた EE の長さ

調査協力者	b	c	f	g	p	d	t	平均
女性１	0.028	0.016	0.015	0.036	0.026	0.032	0.024	0.025
女性２	0.039	0.049	0.050	0.058	0.038	0.044	0.039	0.045
男性１	0.057	0.043	0.051	0.060	0.039	0.064	0.042	0.051
男性２	0.047	0.040	0.042	0.054	0.039	0.042	0.028	0.042
語頭子音別平均	0.043	0.037	0.040	0.052	0.035	0.045	0.033	0.041

表２ “ClVqui” に見られた EE の長さ

調査協力者	b	c	f	g	p	平均
女性１	0.003	0.000	0.024	0.013	0.000	0.008
女性２	0.017	0.038	0.029	0.040	0.016	0.028
男性１	0.061	0.052	0.047	0.056	0.065	0.056
男性２	0.024	0.010	0.006	0.021	0.039	0.020
語頭子音別平均	0.026	0.025	0.027	0.033	0.030	0.028

“CrVqui” の C・r 間で観察された EE のそれぞれの平均は、女性１は 0.025s、女性２は 0.045s、男性１は 0.051s、男性２は 0.042s であり、４人の平均は 0.041s だった。分散分析を行った結果、群の効果が有意であった（$F(3,136) = 24.88$, $p < .01$）。Holm 法を用いた多重比較によると、女性１の平均は他３人の調査協力者よりも短く、男性２の平均は男性１よりも短い有意傾向があった（$MSe = 0.0002$, $p < .05$）。また先行研究とは異なり、基本的には EE は観察されないとされていた “ClVqui” の C・l 間でも 0.028s（４人平均）で観察された。

“CrVqui” の語頭子音別の平均は、b は 0.043s、c は 0.037s、f は 0.040s、g は 0.052、p は

0.035s、d は 0.045s、t は 0.033 だった。分散分析を行った結果、群の効果が有意であった（$F(6,18) = 4.76$, $p < .01$）。Holm 法を用いた多重比較によると、g の平均は p と t の平均よりも長い有意傾向があった（$MSe = 0.0002$, $p < .05$）。

4.2. 考察

C・r 間に観察される EE の長さについては、Gili Gaya（1921：280）が 47ms（0.047s）、Quilis（1993：340）が 0.29s（0.029s）と言及している。今回得られた 0.041s は Gili Gaya の説に近い。また Gili Gaya の説と Quilis の説にはずいぶんと開きがあるように思われるが、Quilis（1993：340）は EE の長さは変わりやすいものだとも述べている。その理由を今回の調査協力者 4 人の結果から鑑みることができよう。女性 1 の平均は他 3 人の調査協力者よりも短く、男性 2 の平均は男性 1 よりも短い有意傾向があったこと、語頭子音に着目すると g で始まる音素連続で見られた EE の平均の長さは p と t で始まる音素連続で見られたものの平均の長さよりも長い有意傾向があったのである。発話者あるいは音素連続を構成する子音によって、EE の長さが変わるのだ。

そして、これまでの他の先行研究とは異なる結果ではあるが、C・l 間でも EE が観察された。C・r 間に見られるほど長いものではないものの C・l 間にも EE が発せられることがあったのである。Carbonell（2008）によれば、スペイン語母語話者が読み書きを習得する際、子音連続間に発せられる約 27ms 以下の短い母音的要素は、知覚することもつづりとして書くこともしないことを覚えねばならないのだが（下線引用者）[16]、ここで言及されている「子音連続」は C・r のみならず C・l も含んでいた。おそらく、Carbonell が体験的に感じていた事柄が今回の研究によって科学的に裏付けられることになったのではないか。C・l 間でも EE が見られることはあるという事実は大きな発見である。

Carbonell の約 27ms 以下という数値の根拠は不明であるが、なるほど男性 1 の発話を除けば C・l 間で観察された EE はほぼ、スペイン語母語話者が知覚しないことを身につけた長さである。これまでの先行研究で C・l 間に EE が観察されていないとされていたのは、実際には何かしらの音を発していてもスペイン語母語話者が知覚しないという前提があったのかもしれない。Carbonell の言うように、一定の長さ以下の母音的な要素を知覚しないことを母語獲得の過程で身につけていくのであれば、スペイン語母語話者は EE と母音を、長さを頼りに区別している可能性が高くなる。もちろん長さがそれらの音素連続の聴き分けを可能にしている唯一の要素だとは断言できないが、それならば /CrV/ の子音間に観察される EE と /CV_1CV_2/ の V_1 の長さを検証する意義は小さくない。

5． 日西母語話者による語頭音素連続 /CrV/ と /CVrV/ の発音

5.1． 結果

日本語母語話者の語頭音素連続 /CrV/ に観察された音挿入（＝epéntesis（EP）[17]）の長さおよび音素連続 /CV_1rV_2/ の V_1 の長さは表３、スペイン語母語話者の結果は表４の通りである。日本語母語話者の調査協力者には順不同に日本語母語話者は1−41の番号をつけた。各調査協力者の EP（または EE）と V_1 の35発話ずつの平均が示されている。（　）内の数値は EP（または EE）を100％とした場合の V_1 の割合である。

表３　日本語母語話者による /CrV/ 内に見られた EP および /CV_1rV_2/ の V_1の長さ

調査協力者	性別	EE　（%）	V_1　（%）		調査協力者	性別	EE　（%）	V_1　（%）	
1	男	0.033（100）	0.044（131.1）	+	22	女	0.051（100）	0.053（102.9）	ns
2	男	0.038（100）	0.049（128.2）	ns	23	女	0.034（100）	0.068（196.6）	*
3	男	0.048（100）	0.055（112.7）	+	24	女	0.035（100）	0.060（170.5）	ns
4	男	0.029（100）	0.037（131.0）	**	25	女	0.059（100）	0.070（119.3）	**
5	男	0.034（100）	0.036（105.8）	ns	26	女	0.065（100）	0.077（116.9）	**
6	男	0.037（100）	0.039（103.8）	ns	27	女	0.047（100）	0.075（159.3）	+
7	男	0.026（100）	0.040（153.1）	**	28	女	0.043（100）	0.051（120.2）	ns
8	男	0.029（100）	0.030（105.5）	ns	29	女	0.057（100）	0.089（157.0）	**
9	男	0.030（100）	0.034（111.4）	+	30	女	0.045（100）	0.054（120.4）	+
10	男	0.053（100）	0.057（106.9）	ns	31	女	0.056（100）	0.071（126.8）	**
11	男	0.034（100）	0.043（126.5）	*	32	女	0.036（100）	0.060（163.6）	*
12	男	0.048（100）	0.050（104.9）	ns	33	女	0.037（100）	0.058（158.0）	**
13	男	0.041（100）	0.046（113.0）	ns	34	女	0.027（100）	0.039（140.8）	**
14	男	0.036（100）	0.042（116.4）	**	35	女	0.054（100）	0.060（109.7）	*
15	男	0.041（100）	0.044（106.7）	ns	36	女	0.038（100）	0.049（129.3）	**
16	男	0.048（100）	0.056（116.7）	+	37	女	0.033（100）	0.055（164.3）	**
17	男	0.034（100）	0.045（131.5）	**	38	女	0.039（100）	0.045（115.8）	*
18	男	0.032（100）	0.039（122.3）	**	39	女	0.046（100）	0.051（111.0）	ns
19	男	0.042（100）	0.053（128.2）	**	40	女	0.038（100）	0.050（134.0）	**
20	男	0.062（100）	0.042（67.0）	ns	41	女	0.038（100）	0.051（135.8）	**
21	男	0.037（100）	0.048（128.2）	*					
平均（男性）		0.039（100）	0.044（116.7）		平均（女性）		0.044（100）	0.059（137.6）	
					平均		0.041（100）	0.052（126.9）	

（**：p＜.01、*：0.1＜p＜.05、+：.05＜p＜.10、ns：p＞.10）

表４　スペイン語母語話者による /CrV/ 内に見られた EE および /CV_1rV_2/ の V_1の長さ

調査協力者	性別	EE　（%）	V_1　（%）	
1	女	0.025（100）	0.075（304.4）	**
2	女	0.044（100）	0.102（232.5）	**
3	男	0.049（100）	0.146（298.2）	**
4	男	0.040（100）	0.107（297.3）	**
平均		0.040（100）	0.108（280.6）	

（**：p＜.01）

日本語母語話者41人全員の平均は、EP が 0.041s、V_1 は 0.052s、スペイン語母語話者４人全員の平均は、EE が 0.040s、V_1 は 0.108s であった。百分率で見ると、日本語母語話者の V_1 の平均は EP の126.9％で、約1.3倍であるかたわら、スペイン語母語話者の V_1 の平均は EE の280.6％で、約2.8倍もの長さがあることが明らかになった。

また日本語母語話者については、男女別に見ると、男性は EP も V_1 も短く、女性は EP も V_1 も長く発している。さらに図２は日本語母語話者41人のデータの相関図であるが、全体的に EP を短く発する人は V_1 も短く、EP を長く発する人は V_1 も長く発することがわかる。

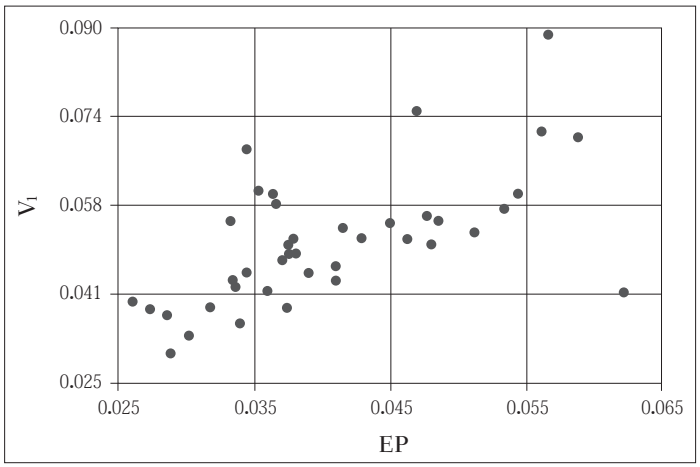

図２　日本語母語話者の EP・V_1の長さの相関図

５.２.　考察

スペイン語母語話者の発話結果について両側検定の t 検定したところ、V_1 は EE より有意に長く発せられていることが明らかになった（t (3) ＝2.86, p＜.01)。調査協力者ごとに両者

の長さを比較してみても、全４人の両者の差は有意に V_1 が長かった。当然だと言えば当然ではあるが、「…二重子音の１つ目の子音から（２つ目の子音の）形状へ移行する際の調音器官の支えとして機能する（引用者訳）」（Real Academia Española 2011：252）母音的要素であるEE は、母音である V_1 とは異なり、有意に短く発音されていることが立証された。すなわち、当然のことながらスペイン語母語話者は /CrV/ と /CVrV/ を発音し分けていることが確認された。

一方、日本語母語話者も V_1 を EP より長く発していることは表３より明らかである。統計的に有意かを確かめるために両側検定の t 検定を行ったところ、調査協力者41名の平均の V_1 は EP より有意に長いことが明らかになった（$t(40)=6.91$, $<.01$）。また、調査協力者ごとに両者の長さを比較したところ、28人は有意に V_1 を EE より長く発していた（表３の**、*、＋）。13人はその差が有意ではなかったが、先行研究で指摘されたようにたとえ [u] の代わりに日本語の [ɯ] を用いていたとしても、調査研究者の半数以上はその音を無声化させることなく、きちんと発音している。つまり、カナ表記すると区別のなくなる音素連続ではあるが、日本語母語話者もスペイン語母語話者同様 /CrV/ と /CVrV/ を発音し分けていると言える。

日西母語話者の発音と比較分析すると、日本語母語話者の EP の平均の長さは、0.041s、スペイン語母語話者の EE の平均の長さは 0.040s で 0.001s の差もない。日本語母語話者の EP は十分に EE と見なし得る数値であろう。V_1 の平均の長さは、日本語母語話者 0.052s、スペイン語母語話者 0.108s と両言語母語話者間の差が大きく、スペイン語母語話者は V_1 を日本語母語話者の２倍以上の長さで発しており、スペイン語らしさを身につけるためには日本語母語話者は V_1 を短くなりすぎずに発音すべきことが示唆される。分析ソフトを変えたことで全体的に長さが短く計測されたと推考されるが（スペイン語母語話者の女性１の平均は、松本（2017）では EE が 37.0ms、V_1 は 83.3ms であったのに対し、今回はそれぞれ 0.025s と 0.077s であったため）分析から得られた傾向も差の程度も松本（2017）と同じであった。調査協力者の人数を増やし男女比のバランスも整えたが、影響することなく、得られた結果はすべて前回を踏襲するものとなった。

他方、日本語母語話者に比べると限られた数ではあるが、スペイン語母語話者の調査協力者が複数になったため新たな考察が可能な点もある。日本語母語話者では、全体的に EP を短く発する人は V_1 も短く、EP を長く発する人は V_1 も長く発し、男女を比較すると、女性は EP も V_1 も長く、男性は EP も V_1 も短く発するという興味深い傾向が観察された。ところがこれはスペイン語母語話者には必ずしも見られない事象であることが今回証された。スペイン語母語話者の中で男性１は EE も V_1 も長く、女性１は EE も V_1 も短いが、女性２と男性２を比べると、EE が長いのは男性２であるが、V_1 が長いのは女性２であった。日本語母語話者は発話の速度（早口かゆっくりしゃべるか）の影響を受け、調査協力者の中では女性よりも早くしゃ

べる男性が多かったようだが、スペイン語母語話者に同じことは当てはまらない。想像できることは、スペイン語母語話者の女性１が他の３人よりも早口であることくらいである。

しかし早口であろうと話すのがゆっくりであろうと、スペイン語母語話者の発話結果を見ればEEとV_1間に一定以上の長さの差がなければならないことは明白である。一定以上の長さの差とはどのくらいか。スペイン語母語話者の中では、女性２はEEとV_1の比率がもっとも小さくV_1はEE（100％）の2.3倍（232.5％）であるので、日本語母語話者もこの程度の比率を保てることを目標とすれば良いのではないか。EEの2.3倍でV_1を発するということがイメージしにくいようであれば、スペイン語母語話者と日本語母語話者のV_1の平均の長さの差で見たとおり、日本語母語話者が今発してる母音の２倍の長さと考えても良かろう。明言できるのは本稿で取り上げた /u/ と /o/ に限られるが、日本語母語話者がスペイン語らしく発音するためには、無意識に発している母音が２倍以上の長さになるよう心がけるべきなのである。

加えて、松本（2016）のスペイン語母語話者による /CCV/ と /CVCV/ の知覚結果[18]を思い起こすと、二重子音間に発されるEEの長さにばらつきがあってもきちんと /CCV/ と知覚されていたのだった。さらにCarranza（2008：14）の研究でも、日本語母語話者の発話で、音素連続 /CCV/ に音挿入があると判断されたものでも３割のスペイン語母語話者はそれを２音節ではなく１音節だと知覚し、音挿入があるかどうか疑わしい発話については８割弱の人が１音節だと知覚したとされている[19]。このような研究結果から総合的に考えると、物理的な長さからは、日本語母語話者が二重子音間に発する音はスペイン語母語話者のEEと同様であると捉えることができ、スペイン語の二重子音を日本語母語話者が発する際に音挿入という方略を用いることを過剰に問題視する必要はないのである。松本（2017）で示したこの革新的な研究結果を今回新たなデータで補いさらに強固にすることができたと言えるだろう。

６．おわりに

本稿では、調査協力者を増やして男女の人数のバランスを取り、異なる分析ソフトを使用してデータを分析し、松本（2014、2017）の後続研究を行なった。

スペイン語母語話者のEEの分析では、その長さは発話者や音素連続を構成する子音の種類によって変わり得ることがわかった。またこれまでの先行研究では観察されないとされていた音素連続 /ClV/ のC・l間にもEEが観察されることが明らかになったが、その長さはスペイン語母語話者が母音的要素として知覚するほどではないためにそのような認識がなされてきたのではないかという考えを示した。

日本語母語話者による音素連続 /CrV/ と /CVrV/ の発話分析では、統計的にはカナ表記で区別のつかなくなる /CrV/ と /CVrV/ の音素連続でも日本語母語話者はきちんと発話し分けているいることを明確にした。そして、日本語母語話者のEPの長さとスペイン語母語話者のEE

の長さに大差はなく、EP は EE とみなすことができる、すなわちこれまで子音間への音挿入が懸念されてきたが、日本語母語話者によるスペイン語の二重子音の発音も、少なくとも長さの面では問題ではないことをデータで裏付けた。

しかし /CrV/ と /CVrV/ を区別していると言っても日本語母語話者全体ではスペイン語母語話者と比べて V_1 の長さが非常に短かった。スペイン語母語話者の調査協力者 4 人のデータと比較することで、日本母語話者がよりスペイン語らしく発話するためには、V_1 を今の 2 倍以上になるよう発すべきであるという具体的な数値目標を提言することができた。これは、日本母語話者へのスペイン語教育分野に貢献し得る提唱であると考える。

松本（2017）以降、日本語母語話者がスペイン語をスペイン語らしく発するためには母音を発する絶対時間を長くすることが重要な要素であろうという考えが頭の中にあった。そしてその考えは、分析・研究を進めるにつれて確信に変わり（その数値は本稿で実証したが）、現在は、音挿入や音添加をしないことよりも、[ɯ] を [u] の代用としないことよりも、[l] と [ɾ] を発音し分けることよりも、ましてや巻き舌ができることよりも、初期に学習者が身につけるべき不可欠な要素であると考えている。早い時期に「母音は自分が想定している長さの 2 倍くらいで発するのが良い」とアドバイスすれば、母音の発音に意識を向けることが定着し、第二外国語という限られた授業の範囲で得られる少ないインプットを補完するようになるに違いない。少しでも効率的に学習するためには、このように研究で立証された事柄を教育の現場に迅速に導入していくべきであろう。

註

* 本稿は日本イスパニヤ学会第64回大会（2018年10月13日於南山大学）と XXI Congreso de CANELA（2019年 5 月18日於静岡県立大学）における口頭発表をまとめ、加筆修正したものである。

1 tíguere と記されるべきであろう。

2 本稿内では、日本語とは東京方言を指すものとする。

3 スペイン語における開音節の占める割合は、Canellada y Madsen（1987：43, 44−46）によれば、約 69.88％でこのうち CV 型（C＝子音、V＝母音（以下同様））が50％以上である。Dauer（1983：56）によれば開音節が70％、閉音節は30％である。

4 日本語は歴史的にはもともと CV という構造の音節しか許容しなかったが、漢語や外来語の借用、音便をはじめとする音変化の結果、VC（例：「案」/aN/）や CVC（例：「缶」/kaN/）などの閉音節も受容するようになった。現代の日本語が許容する尾子音は、撥音（「ン（/N/）」）と促音（「ッ（/Q/）」）に限られており、その数は音節全体の10％だ（窪薗 1998：66、木村 2006：21）。また昔の単純な音節構造を反映して拗音（「キャ /kja/」「キュ /kju/」「キョ /kjo/」など）以外の子音結合を許容しない。ただしこ

れを C（子音）＋ j（半母音）という子音結合とは見なさない、単一の子音音素であるとする考え方もある（窪薗 1998：70）。

[5] どのような条件下で母音の無声化が起こるのかは法則化できていないが、典型的なのは狭母音が前後を無声子音に挟まれた場合だとされる。それは「日本語では母音が明確に発音されなくても子音だけでイ段音節をウ段音節と聴き分けることが可能」（前川 1989：140）であるからだと考えられる。

[6] 外来語のカナ表記に見られるように、他の言語から借用された語は原語の音に出来るだけ近い状態を表わそうとしつつ日本語の音節構造に合わせた形になっている。そのため、日本語が基本的には許容しない子音連続であれば、カナ表記では子音間に母音が挿入されることとなる。たとえば /bre/ と /bure/ は両者ともに「ブレ」と表現され、カナ表記されることによって原音がわからなくなるといった不便が生じる。外来語はともかくスペイン語の音をカナ表記することの議論にはここでは立ち入らないが、初学者用の教科書では取り上げられることの少なくない方法であると同時に、学生がよく行っている行為である。それゆえ、本稿では原音は異なるもののカナ表記で区別のつかない音素連続を取り上げることとした。

[7] 日本語母語話者の有効録音音声29人分（男性20人、女性９人）とマドリード出身の30代のスペイン人女性１人分である。

[8] スペイン語では阻害音・流音連続は１子音として扱われ、これらの子音音素連続を日本におけるスペイン語教育の世界では「二重子音」と呼ぶのが主流である。この呼び名は、山田（1998）、興津（1992）、ロボ他（1993）、北村・ルエダ デ レオン（1995）など多数で使用されている。

[9] スペイン語の二重子音は /b, k, f, g, p, t/ ＋ /l/ および /b, k, d, f, g, p, t/ ＋ /r/ の13種類だが、/tl/ を二重子音と取り扱うことには異論があり「(/tl/ は二重子音と）見なされないこともある」（山田 1998：21）ため、ここでは除外した。

[10] 音挿入・音添加には /u, o, i/ の可能性があり、環境によって選択される。/o/ は歯茎破裂音 /t, d/ の次に、/i/ は硬口蓋破裂音 /tʃ, dʒ/ の次に挿入され、/u/ はもっとも一般的な挿入母音として多く採用されてきた（いる）（窪薗 1999：231, 小林 2005：29−30）ため、本稿でもこの慣習に従った。

[11] １コマは90分、半期14回、年28回の授業である。

[12] 調査協力者と筆者のみがいる室内で、突発的な雑音が混入しないことを波形上で確認しつつ録音を行った。

[13] １回目同様、室内には調査協力者と筆者のみがおり、突発的な雑音が混入しないことを波形上で確認しつつ録音を行った。なお、筆者の研究室は研究棟内に位置している。

[14] 録音モードのサンプリング周波数は 96kHz、量子化ビット数は 24bit である。

[15] 以後本稿内では elemento esvarabático を EE と記すこととする。

[16] まだ低年齢である６歳（小学校１年生）では、音の構成要素に注意して聴くと EE を知覚する傾向があり、８歳（小学校３年生）でもあまりなじみのない単語については、声に出して単語を発し、聴き取ったものと自分の発しているものを比べ EE の長さを調整するという（Carbonell 2008）。Jiménez y Jiménez（1999）も小学校１年生〜３年生を対象に行った実験を通して、子音連続のつづりを子どもが自分で正しく書くのは難しいと結論し、音韻の知識が増えれば、２つの子音から構成されるというつづりの原則を発見できるようになると述べている。

[17] 以後本稿内では音挿入（＝epéntesis）を EP と記すこととする。

[18] EE は長めでも /CCV/ だと聴かれることがほとんどで、/CVCV/ さえ /CCV/ と判断されてしまうことが少なからずあることが明らかになった（松本 2016：73−74）。

[19] ただし、子音間に挿入された要素が音節核の母音と同じかそれ以上の長さである（Carranza 2008：14）あるいは音節核の母音よりも長くかつ強いものを音挿入があると判断した（Carranza 2009：5）としており、疑わしい場合の定義は明かされていない。

参考文献

Canellada, María Josefa; Madsen, John Kuhlmann（1987）*Pronunciación del español: Lengua hablada y literaria*. Madrid: Castalia.

Carbonell Cruz, Eduardo（2008）*Las vocales esvarabáticas y la enseñanza a los niños de los grupos consonánticos del español*. <http://autismointegral.blogspot.jp/2008/06/las-vocales-esvarabticas-y-la-enseanza.html>（参照2019−09−12）.

Carranza, Mario（2008）“Fenómenos de interferencia fónica relacionados con el fonema /ɯ/ en la interlengua de estudiantes japoneses de español como lengua extranjera.” *Estudios Lingüísticos Hispánicos*, 23, pp.1−22.

———（2009）“Percepción por hablantes nativos de español de las realizaciones del fonema vocálico /u/ y de vocales epentéticas en la interlengua de estudiantes japoneses de ELE.” *Lingüística Hispánica*, 32（1）, pp.1−14.

Dauer, R. M.（1983）“Stress-timing and syllable-timing reanalyzed.” *Journal of Phonetics*, 11(1), pp.51−62.

Gili Gaya, Samuel（1921）“La r simple en la pronunciación española”. *Revista de Filología Española*, VIII, pp.271−280.

Hara, Makoto（1990）“Método de enseñanza de la pronunciación española a los alumnos japoneses”. *Actas del segundo congreso nacional de ASELE*, pp.371−379.

Iribarren, Mary Carmen（2005）*Fonética y fonología españolas*. Madrid: Síntesis.

Jiménez Gonzáles, Juan E.; Jiménez Rodríguez, Roxana（1999）“Errores en la escritura desílabas con grupos consonánticos: Un estudio transversal”. *Psicothema*, 11, n 1, pp.125−135.

木村琢也（2015）「第１章　音声学・音韻論」高垣敏博監修『スペイン語学概論』くろしお出版，1−14頁.

木村義之（2006）「第２章　音声・音韻」沖森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾著『図解日本語』三省堂，12−39頁.

北村光世；ルエダ デ レオン（1995）『日本人のためのスペイン語』再版，エクセルシア.

小林泰秀（2005）『日英外来語の発音』（株）溪水社.

窪薗晴夫（1998）『音声学・音韻論』くろしお出版.

———（1999）『日本語の音声』岩波書店.

ロボ フェリックス；エレサ アヌンシアタ；ロボ ルシア（1993）『現代スペイン語入門』第12版，大修館書店.

前川喜久雄（1929）「母音の無声化」．杉藤美代子編．『講座日本語と日本語教育２　日本語の音声・音韻（上）』．明治書院，135−153頁.

Malmberg, Bertil（1965）*Estudios de fonética hispánica*. Traducción de Edgardo R. Palavecino, Madrid: CSIC.

松本旬子（2014）「スペイン語の elementos esvarabáticos の音響的分析と日本語母語話者による知覚」『イスパニカ』58，145−166頁.

———（2016）「スペイン語母語話者による語頭音素連続 /CCV/ と /CVCV/ の知覚と日本語母語話者による同 /CVCV/ の知覚」『イスパニカ』60，69−92頁.

———（2017）「日本語母語話者によるスペイン語の音素連続 /CrV/ と /CV_1rV_2/ の発音―Elemento esvarabáticoと V_1 の長さの比較分析―」『イスパニカ』61，111−126頁.

Navarro Tomás, Tomás（1918）“Diferencias de duración entre las consonantes españolas”. *Revista de Filología Española*, V, pp.367−393.

興津憲作（1992）『外国語から見た日本語』近代文藝社.

Quilis, Antonio（1993）*Tratado de fonología y fonética españolas*. Madrid: Gredos.

Real Academia Española（2011）*Nueva gramática de la lengua española. Fonética y fonología*. Barcelona: Espasa.

山田善郎（監修）（1998）『中級スペイン文法』第三刷，白水社.